北方山草（39）：7-10. March 2022

渋江長伯『蝦夷草木腊葉帖』（1799）にみる道南のヤマエンゴサク標本

札幌市　**高橋　英樹**

はじめに

今からおよそ 220 年前の 1799 年（寛政 11 年）、江戸幕府の命により奥詰医師・巣鴨薬草園総官の本草学者渋（澁）江長伯（しぶえちょうはく）ら一行 34 名は採薬調査団として旧暦 3 月 24 日に江戸を立ち、北海道南部の松前に 4 月 22 日上陸、エリモを経て道東厚岸までの太平洋岸側を往復して 9 月 2 日に松前に帰還、9 月 27 日に江戸に帰着した。総計 142 日にわたる蝦夷地の植物調査だった（山岸 1988）。この調査には渋江長伯に加え土岐新甫（ときしんぽ）、谷元旦（文啓）（たにげんたん）などが含まれ、彼らによる多くの紀行文、日誌、図譜などが残されその写本も多くあり、後代の研究に供されている（平野 2014, 山岸 1996）。

この調査時に採集された押し葉標本（腊葉標本）コレクションは渋江長伯『蝦夷草木腊葉帖』（渋江 1799）と呼ばれ、北海道で採集された植物標本としては最古級のものとされる（外山 1992, 山岸 1996）。明治時代に帝室博物館にあったこの標本は、植物分類学者の牧野富太郎に払い下げられ、さらに北海道大学の宮部金吾に研究が託されたとされ、現在、北海道大学総合博物館植物標本庫（SAPS）に所蔵されている。植物標本は和綴じで 22 冊あり、もともとの標本は 42 冊（31 冊とも）とされるが、宮部が再装丁（裏打ち）したときに 22 冊になった可能性があるという（山岸 1996）。

山岸（1996）はこの北大所蔵の『蝦夷草木腊葉帖』について、1) 採集植物が現在も野生しているのかどうかを調べれば環境変化の指標になる、2) アイヌ語研究にとって貴重な資料であること、などを述べた。山岸（1996）の記述は日本医史学会総会の一般口演での抄録であり、標本調査をして種名を明らかにし現在の植物名と比較したとするものの、その結果は現在まで公表されていないようである。

現在、この渋江長伯『蝦夷草木腊葉帖』（以降「渋江コレクション」）を実検・再同定してその確からしさや標本状態を評価し、採取地名、アイヌ名などを整理する作業を行っている。なお「渋江コレクション」（渋江 1799）の精細画像は「蝦夷草木◆セキ◆葉帖／渋江長伯等」として北大図書館北方資料データベース [https://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/] で公開されている。

道南のヤマエンゴサク標本

北大図書館北方資料データベースの「蝦夷草木◆セキ◆葉帖／渋江長伯等」として公開されている「渋江コレクション」画像の中から、帖番号1・ページ番号 16、タイトル「ササバエンゴサク」を示す（図1）。

北大の「渋江コレクション」の、和綴じの一冊を両開きにすると、左側ページに腊葉標本が貼付されている。標本の状態は種類によって様々だが多くの標本で虫害があり、少なくとも一部が欠失していることが多い。「ササバエンゴサク」標本にもかなりの虫害